



里見八犬傳 第九卷 卷十五

特
100
600
257



600
257

南總里見八犬傳第九輯卷之十五

東都 曲亭主人編次

第一百八回 西園河原小南容北人小逢ふ



却説又那逆旅經紀人の聚來る人を尋ねて親小逢ふ扇子を推啓して曾下を徐や
 りゆら扇は在りける程小既に没る日と見えりて遠く扇子を置きて犢鼻褌刺夾にて
 找せ出恭しく衆人から向ひて東西々々南北係てほほほ辱く光臨と賜ひ給ひ四方の君子
 達を召れよ鳥許がきうういへども小可の旅より旅世渡るものにていへども當所へ初度の見
 参然も今日より賣買の用場をいへども知せぬるも又かへりて扇子を扱ひて逆
 ち小叩く指示して是は建てる招牌にて崖畧に知し召れり小可家傳の膏蒸の搦力の
 開祖と世に名を野見宿禰の神方と撲傷折損損瘻の即效ある風の塵埃を拂

八犬傳九輯卷十五

ふより速く價へ一盒永樂十文貯置せぬ。怪我不慮瘡を醫を招き重宝此より宜し
 又只撲傷のさるる癰疔癩を名の腫瘡瘻凍瘡刀瘡も用れ亦妙却賣
 買の御愛敬也此弟子萩野下露と敵を小立し拵力の合を電覽の款をらん小
 可も其昔年壮より一時拵力を好むゆゑに既筋力衰へてはかひあらずいへども其像を
 左も右も侍りいれ今我年歳小似て多暮景小及ぶの幸い夕月夜中
 天の一朶の雲もあればかきと急ぎぬる刀袷連の在りて拙技を尙せ先や拵刀の來
 歴故実を聊演述仕らんといふやと退て發見小尻をち櫛て扇子を筋力うち咳に抑
 拵力の盪傷ひり無仁天皇即位七年當麻邑の勇悍士名と蹶速と喚做まゐるその
 筋力角を毀れ鉤を伸べ再を擧ぐ天下の一箇とて敵をうと多るる天皇の美と知
 食倭直の祖高尾市と勅使とく出雲國の剛力士野見宿祢を召上り
 隨即當麻蹶速と拵力を令て獻覽あり小野見宿祢は煨煉也替力也蹶

今馬奴の馬を罵りて
 不てそとを
 相撲の腹
 最も腹
 言田舎
 送れ

速く捷りけん蹶速竟小蹶小れ脇骨骨踏折れて叫びあき死でけり宿禰の
 恩賞小蹶速が地を賜りてそ藤原都方置れ朝廷仕なりぬあきとる米邑の
 腰折田と喚做ま村ありそ蹶速が舊地をうと無仁紀小載せれる本文小據推量
 る小當時の拵力の足を抗て相蹶ると言とせりその後天武天皇の十二年秋七月隼人
 來朝する折阿多隼人と天偶隼人の相撲を令とて獻覽あり天偶隼人勝ると亦天
 武紀小載られ是より後世々の朝廷相撲の節會とゆれんと諸國の力士と召ま部
 領使と唱へりその力士多し近衛小隼と拔萃と最も小補一を腕を助ふ
 補一を月勝れるを拔るとも後の相撲小推當れ最も大関腕も大関脇助も小結
 拔もハ即横綱傳受の儀似るべし然中葉小至りて最後小執ると関といひ関を
 所云ち止あり名目ありざりて後世轉て大関の稱呼あり昔ハ相撲人を分つ左
 右と唱へく東西とらむ且その為體積鼻禪の上侍衣下袴を着く劍を挿し立合ふ

あぐさ 綾足 折小尾 左の葵花 右の瓢花 紐を用いて 并小裏書 又吉田氏 方師表 津股野 朝

折小尾と解く。裸形に做する。今の相撲と異る。但し左右の為体各聊同く。左の葵花を挿頭と。右の瓢花を挿頭と。花の即綵。前々左右或は紐。或は紐を用いて。帯を加え。或は袴を着ると。着るとの差別あり。その他法。尋端事。西宮記。并小裏書。江家次第。并小裏書。吏部王記。北山抄。今悉く引出ん。又吉田氏。これを考る。神代より。名族也。定小。金鑑の舊。家と考。今に至る。方師表。又武家執制の世。平家世盛る。一時伊豆園の人。氏へけ。河津股野。角力の事。曾我物語。不見れ。世の人。又鎌倉の右幕下。朝の死時。小長居と喚。做も相撲人あり。約莫。関の八州。小克者。と考。え。頼朝卿の

折望依り。秩父重忠が立合ひ。小長居の酷く。肩骨と折れて。廢人なり。角力の折重忠。烏帽子。水干。搔繕ひて。長居と立合ひ。古今著聞集。載られ。昔。貴人の御前。角力。裸體。思ふ人も。あなれ。至尊。御覽の角力。たの。立合。折の衣裳。と着。その證文。上。如。當時。重忠。為体。敵。微賤の者。多。故意。衣裳。と解。昔の角力。裸體。又古今著聞集。中葉の相撲人。姓名。多く見。え。中。腹攪。喚。做。名。譽。の。相。撲。あ。天。窓。と。敵。の。腹。當。攪。り。勝。と。さ。折。ん。ん。の。時。中。納。言。伊。実。卿。も。角。力。と。好。み。父。大。臣。伊。通。公。を。徴。人。為。腹。攪。と。立。合。と。勝。負。と。試。み。小。腹。攪。伊。実。卿。四。辻。を。合。り。て。頸。骨。折。可。引。着。ら。れ。攪。ん。と。ま。る。攪。り。弱。く。虚。俯。小。倒。れ。恥。て。逐。電。考。因。て。昔。の。播。紳。武。弁。も。殊。更。相。撲。と。好。み。枝。修。煉。と。み。り。合。り。

呼哉而三遍那這とるうち繞りて只顧不請薦れども威遠巡をまぬのを買んら者
 あるとるれば上風望を失ひて憶せ聲をゆり毀れ下露閣ねるの咱們當所へ初と
 来りけ生活の開ゆるれば殊更骨を折る衆人達を慰め人の山成を群集ふ似げ
 る繞り一盒十文の膏茶を買ふ人なれば飲りてその情を閣ねる日暮きり今
 宵の旅宿へ立ちて明日へ他郷へ走る益る死と吐け下露も腹立ちし嘆息氣し
 る持る稍退んとせ程前より衆人と立離り見て上風が為体を似而非技を
 と感し思ひ親兵衛懐き孝嗣小目を注ぐ找みぬと喚近づけ我も前より這
 里存在り汝達を技藝と観る不相撲の故実も杜撰なる立合も亦法稱して老
 人より多し汝は修煉精妙賞まる猶ありの并に料を見つ空骨折れ只
 むハ己ん我その膏茶を皆買んむ什麼何なるの價をぞと問れて上風笑ひ下露が
 答をば遠く立迎へて辱れ花主よりきり今日推方膏茶の百盒許

のいん價の永樂壹貫文も事足りくは然るも御用もあつ下綴一盒
 召るとも百十數人なる這内中も一個の花主と思ひなれば百目の上より下露一
 盒をばとる親兵衛は否とそその膏茶の言ふ拘らるありて女主人御
 覽の相撲の勝者への纏頭も平民も亦賞錢を取ると俗に命けて花をの
 るその膏茶の左も右も和主が技藝のあらはれ花を合せんむの懐
 より圓金一枚合ふと卒を遽與て上風の呆白く左右多く受も又意外の
 造化の可一儒士も听るとも士に己と知る者の為死に女に己と知る者の為死に
 己の知己と思ひなる刀袷の恩賜と云と推辭稟き倒る人を知る者不似て反て
 礼のゆるるれも其のいとまりと辭ふ親兵衛推禁せ任するの東西口誦要る
 君子の断金の交あり路上の人も知音と思へ蓋と傾け故舊の如し豈白頭を新
 る浮薄に交り慣ふと上風推辭ゆる且感し且歎きを速く中をなく收れ下露も

亦欲まさく。金ひんご見み小こ乘まるる膏かう菜さいをを依よ合あてて親おや兵へい衛ゑのの遞たが与よまんまんととせせ程ほど尚なほ立た稱せうする
衆しゆ人にんの内うち中ちゆう一いつ個ごのの天てん漢かんあり。忽とつ地ち訛し聲せい振しん發はつし。女めををれれななららぬぬ事ごとあり。あありりとと吸す禁きんめめははし
隊たいををままれれ。土と色しきのの邊へん近ちかららずず大だい家け俱く誦じゆして。齊せい一いつ見みららずず夕しやく月げつ夜や紛まぶぶるるああららば
正ただのの大だい漢かんのの爲ため体たい面めん黑くろくく眼がん圓えん小こ鼻び低ひくく多たてた左さ右う小こ扇せん比ひ厚こうくくとと髭ひげ髭ひげ再また小
包たれれ月げつ額がく延のびてて春はる山さんのの結むす縷いと草くさよりより猶なほ敏みん糸いと。髭ひげ毛もう乱みだれれてて百ひやく足あしのの蜈むぐ蚣ごとと串くわん小こ貫くわん瓦わ
たるたるる小こ異いるる身み身み身み浸しん染せんのの榜ぼうのの夾くわ衣い被かけけ。片かた褌ふんどしとと叩たたくく端たん折せつりり。白しろ榜ぼうのの積たくわん鼻び禪ぜんのの高
已いま時とき可かままるる前まへ垂た脩しゆ結むす做しよ。直ちやく木ぼく理りのの梧こ桐とうのの下した駄だのの小こ肉にく組ぐみのの似にくくららずず穿す鼻び裏うら。一
腰こしのの緋ひのの縮ちぢ緬みんのの圓えん格かくのの細さい帶たいとと右みぎ斜しや片かた結むすびびとと左ひだりのの肩かた差さ筭そろ盤ばん絞しぼるる内うちよりより
拭ぬぐしし令たま直ちやく項かう纒たるねねてて揺ゆ動どう出でるる百ひやく魂たま酒しゆ氣き分ぶん々々とと人ひとのの鼻び穿すららるるのの半はん醉ざい半
醒せい人にんをを物ものととせせららるる地ち方かた漢かん生せいのの勢せい好こうてて怒どりり好こうくく爭せう小こ煩ぼん惱なう口くち舌せつのの祟そと鬼きるる小こ虫
蜀せき二に國こくのの城じやう惶きやう狄てきとと思おもひひ怕おそるる衆しゆ人にんのの事ごといいてて求もとめめとと防ぼうめめもも見み果はたたるるもも立たちち也や

去されれてて存ぞん在ざい。當たう下げ件けんのの大だい漢かん眼がんとと膝ざしとと向むか騰たう躍やく。上かみ風かぜををらら對たいひひ這は奴に甚しん大だい胆たん之
若し誰たれがが許もと可か受うてて這は里ら張ちやう々々賣ばい買まいををままるる。約やく莫ま這は漢かん父ふ街が頭とうをを始はじめてて生せい活かつをを着ちやく
客かく商しやうのの必かならず先まづ咱うちら們らのの樽つぼをを饒あやりり。或ある周しゆう折せつをを送おくららるる。ああららずず後のちのの生せい活かつををままるる我われがが知し
らら經かう紀き見み銀ぎん賺せんととままるるももああららるる。故ゆゑ我われ始はじめりり衆しゆ人にんをを敬かうむむ若し膏かう菜さいをを買まいせせらら
るる。那あの國くにのの馬うまのの骨ほねをを牛うしのの屎ふんをを知しららぬぬもも見みるるもも足ありり。及および似にてて非ひ技ぎのの金かねをを取とりり鳥とり許もと
人ひとありりとと亦また受うけけるる。快たいのの金かね返かへささるる。とと嚙か着ちやく像ざうくく罵ののりり。上かみ風かぜ吹ふききてて毫ごもも撓たが
ままるる。身みをを構かまへへ。向むかひひ。開ひらきき。和わ主しゆ地ち方かたのの死し俠げつ也や。咱うちら們らのの他た郷きやうのの旅りよ客かく
ををれれ知しららずず。平へい何なにのの艾ゑ然ぜん。人ひと情じやうあありりとと銀ぎんをを賺せんてて後のちをを欲ほむむ。隨したがふふ贈くわんりりももせせららぬぬと
和わ主しゆ外がひ醋そ氣き也や。人ひとをを禁きんめめ我われ膏かう菜さいをを買まいせせららずず。非ひ道だう之の況かう。那あの方かた様さまのの恩おん賜たまひひ和わ主しゆがが差さ配はい
ままれれいい。いいふふとと返かへささるる。抑おさへへ和わ主しゆ何なに人ひととと向むかせせもも果はたた大だい漢かんののいいふふ聲こゑとと并ならびび。噫あゝ老らう老らう
奴にがが暗くらいい。漢かん草そう寺じのの觀くわん音いんとといいふふ。知しるる者ものののあありりもも誰たれもも我われ名なとと知しららずず。快たい拓た合くわ耳じ原げん

櫻櫻と聴聞せむ武藏下総西國河の西の岬岬に隠れるは向水五十二天と喚做す
豪い我事親の時より任田河同流れて釣漁の生活も老母のまゝに聞評の裁判色
情の受授一旦人の馮と事我撮合て成さるる。あどめて我下風立の乾見乾弟を
斜り量り箕をもく敷るも容易く量り盡さるるも中の中も特勝れん枝獨結
素も吉と喚做す我肉身の弟也船を馳し山を抜く旅力を誰ぞ知る約莫
坂東八箇國の関相撲を二勝も立合まるといふて克くもあふ口本銭の没
らねどこのいふ隨の長談義乞見相模の内合の是の沙汰の涯りん徳の朽惜ら
立合て我と勝負せよ快立と飽する罵の勢ひも若れて枝獨結素も吉も羣
集の中より我と親兵衛より向いて阿侍年少も身も心も所むく見相模の
一両と金の花用や酔興より這云吹起りも金より復して快くも聞評の側杖打と
んどと誑を親兵衛冷笑してあるるあどいふも我も亦行人れ地方の私法を教

この我の我が盤纏をもち。這經紀の合をもち。和郎們の干る事あり。素も吉
のあへど金の和主が盤纏でも地方の習俗を破りて祟と脱れぬ敵も覚悟をせよと敦
圍ふと上風をへり喚禁めり。各云品のあつてもその方より觀場見たり然も少年もの敵
を喚り大人氣を。鄙語のを理の前の道理の退く。自然の勢ひ然る發憤の情由
あつて明日の他御へ走る。下露東西皆拾收けり。旅宿罷る。とられて萩野下露も
立した腹も横もまる。招牌の干のを掛て抜合んとせ。程の五十二天透き走り鬼て腕を
抗て聲高申す。這奴も似る痴漢も兼掛る出入の港も尻の帆揚て逃れぬ。那地へ逃さ
ん。是を喚へと采螺も似る。握拳も振打て打んた。下露のさるも丁と捉禁て樹と跟
入て掖組も素も吉吐嗟とる。掖介さんと皆も我も上風推隔て受ら柱を
相挑む。四巻の山風も品根の藤揺めり。小波を拂も異なる。上風の年老れも素も
吉相撲も修煉あり。下露も亦素人もある。技さ力剛ければ五十二天と素も吉も思ふも似



吉推著られて克と合と易とわねの味を両聲鳴り立て大家空と喚れ群集の中にお
 糺りと巻と握りて五十三太夫火家の破落戸に四十名咄と嘯泣く三七二十一走鬼
 なる破竹の勢ひ衆人呀向と駭怕まき素破閉諍をさるりあめれた頼れ立喋りて只蟻
 子の糺と散ま像く往方も知ざるのけり介程の破落戸に齊一五十三太素の士を
 幫助と競ふ法の実戦先を抜む群を鬼と両個の敵もど打仆さんと喘を上風下
 露の捲潜を巻と避く多うわれを迹を續け破落戸に招牌登見膏蒸を打推に
 河に放下して連の狂を中の中素の吉親兵衛を以是逆旅の少年をと思悔り生拘り
 懲らして頑童をせんと火急の情態両個の敵もど勢を儘して五十三太夫目を注しよの
 時もその相若とと孝嗣と共侶の勝負誰何とち目成りて親兵衛近つて聲をも被
 け左より腕腕下と拉ぞ推倒さんとける親兵衛諒を振解して左右を打ち両個の
 項髪も脚を一度の棒と掴と拂と投に五十三太素の吉のいづく遙に放下さまき。

何火と落さけ。當下親兵衛聲高き毎我名を知り安房の里見の御内人大江
 親兵衛仁るを若們頑愚非道の真罰本事を感懲え其首を退と罵りて
 群を中面も振り走り鬼を勢ひ虎の毛を馳る像く當る儘に打倒せ孝嗣も
 亦俱に抜きて敵も棒を白むの精妙組とて投げ投伏せ四方に當る這那両個の勇
 士の幫助の上風下露替力始に十倍と既怖れ破落戸にを捲爪と打倒し劇に四
 個の棒を誰一人も味を允せんとる。逃水も陽敵の命を辛く免れて一人あ
 らまき介程五十三太素の吉親兵衛が鬼神を欺く勇力武藝を酷く懲りて左
 右の水際小四の流を儘て三四町川下より逃さる然り又上風下露の破
 落戸にを打棄て替の怨を承る茶親兵衛も朝に地上に跪居て上風が先
 けする定不慮の災厄之敵も勢を脱れんと思ひひし御両君の御助力を
 事と平ゆる然り短辭の盡さるる然り君が大方の頭立を兩個の士五十三太

此の
 こと
 全

素も吉とぞと左右受て投懲りぬ折名告せぬふも摩て知りぬ和君安房の里
 見殿の御内人大江某主と在るも思へ不審の事ありぬ因て尋まんと欲し和
 君の猶大田小文吾犬川莊介と喚做する兩個の勇士と豫より知れぬと問はま
 親兵衛と領と然る大田氏の我外小父ありて大川も亦我與不同因果の義兄弟益
 八犬吉一人の原来大田と大川氏を相識る和主の越後ある小千谷の御の逆旅主人あり
 家跡の慥石龜屋次因大更ふの由と問はれられ呆るも小眼と睜り顔らち長
 観て什麼の事か我実名とぞも猜のゆけ音也々と嘆唱し憶を側を
 又親兵衛も朝ひて這里侍る後生の小可が相撲の弟子や実の名は百堀卿三
 と喚做する心術老実なく機密と洩さくもわねぬ意とぞもあて就て不審あり
 去歳の夏大田主の我宿所小淹留の程眼病の折るも特更ふ身事と云云

とのいふうち不娘ありを知らぬの刀槍大江和子の當時七八才なるの穉見
 武藝力量九夫ありを備別小少筋の御舎弟のいと問へ親兵衛合笑疑
 惑のその以るたわも酒家年四才の秋必死の災厄あり折過世の母あり下も伏
 姫神の冥助ありを悉くのりて今茲も六穂安房の富山在
 てとて身長丈心術大人備小仙境餌茶の故も然神女示教あり
 我七犬士の上のいふ雙のゆき粗歩知り逆あらざるのみあてて雙の不測の
 穴窮厄あり片貝三嶋郡の獄舎敷糸れとの春正月某の日未見の由縁の知
 助のよも免るるを皆是神女示教せられ知る事とせられぬ我も亦故の
 近く近曾出世と許され姑且國主仕へる小後の事と知る事と尋問ふべく
 猶我も詳の解示さく思へも這里ゆく秘密を談ととらひ考嗣をえと

せぬいふそを切てのりるる。大坂毛野の助剣とてつくる大田小文吾
大川莊介們がどつか件の兩個の應見の去歲の六月誅戮を石濱大塚兩所の
使者馬加御武丁田豊実們が渡一遣一遣の御武豊実も歸東の途にお
命を喪い小文吾莊介が首級を齎し、真偽詳るる額藏の莊介が所持する
兩刀の落葉小條ありされ首級も小文吾莊介と姓名同は別人ありと千葉大石
兩家より意見を廣て那兩刀を返されし今思へ去年這里を誅すの必同
名異人あり。這回毛野の助劍の夢ある兩人を突の小文吾莊介も然るも大坂毛
野胤智の就中並に猛者去歲の六月信濃路を郷武豊実の殺果も他
所為るんとする者あり今茲武藏の湯真也解目前の内意お依りし河鯉權佐
守如相譚れて他が父の仇をえ龍山縁連們を討捕る事情も今又思へ現人
ありあつるあり是れより再思ふ裏小毛野の殺れる千葉の權巨馬加常武及額

御内
とよ
遺
ち
ん
ん
ん

藏の莊介們の友幾名も殺れり大石氏の陣番丁田町進并小卒川庵八郎軍
木五倍二賊上宮六們が奸詐昔悪徳を死後小噂を流るる乃若くは證
据もあれ玉と石とを分別あり。あつた初憎う思ひ額藏の莊介も又天田小文吾も考れ
崇るる者あり但他們豊嶋の殘黨大山道節が我兄弟也俱謀りて管領家
危うせしを恨む。あつた何と思つやと問れて由充阿とるる謹て答ふるも取有
かたきも辱し御意と承りゆりゆり実小隆直を去年誅戮せしむる那莊介と小
文吾への折も稟上す不錯を必同名異人して這回毛野の助劍あるも眞の莊介小文吾
るる今ゆり疑ひるるの歎人情をりゆりゆり他們豊嶋の殘黨は大山道節が荷
擔まで管領家と違ひなり且信乃が火攻ある五十子の城の聚合の憎む家似れぬ
亦公道をのり人各忠義の與也他們の都て義士を那常武縁連們と目と同
して論むべくもいふ。あつた痛やく惜とるる何と惜は解目前の御落命今ゆ

稟も疎函るべし誠や那ぶ家の毒毒る毎人縁連們を刈除んと守如仰合
れて微妙謀らるる事他聞の差錯を惴りて刃伏しめ負烈を三の誠心の
まの折小稍見れて管領先非を悔ひて亡後まの御大功と誰う思ひを成るる有
かまの稟を服大刀自り听々涙此みく然とそるる御前鮮目東園より
と使介をり木天蓼丸のふ就て久く禁獄の雪ま次園太とちるる湯嶋の
神の御示現は罪者者より神ぞ知せぬいり許さぬなりと最町寧の
書目衣てあそ消息此あり并々疑あわねも又思ふよわね速の沙汰あ及り
幾程も五十字の凶変を中這里のさそ胸安くゆるめられけりまの黙止あか
然一も鮮目が生前の神の示現と畏れ命を奪ふ罪囚を放ち遣く去る人後世の
障りまらぬせん那次園太の恙もて獄舎に在る後甚麼を問せぬ然れども
稟上んぞと思ふのう暇あて向れまると本意をね那次園太の恙もあを仰りて

幾番も拷問を遂ひり陳考趣始差の木天蓼丸の短刀の船虫と喚做賊
婦が懐小隠一帯を固様をのふより一旦船虫と捕一折那短刀次園太が宿
所へ送り置れを事小紛れて訴稟さ開を主丈二評れて稟解免證據を
免れまてと陳考のまの虚実を定め難く昨日五十字の城内より東角脚力の
雑兵の賣弄奇談と听ゆり料を件の実をゆり那船虫去去の夏當園と逃去て
萍流ひく武藏の司馬濱の邊に在り積悪の宜訓を奸夫媪内と共侶活き
が日暴牛の角小推れて突殺され甘他們が年来の積悪を寫してあり是より
船虫が下野の赤岩に在り一時非義好曲の支破れて大村角太郎追放され更縁連
伴れて下野より武藏のへ俱小赴く旅宿を縁連が携る木天蓼丸の短刀を竊
合て走りし時初て見れぬ觀る者都て敬馬に怕れて神所ゆりありこの
る一あのさそ五十字の城内へさそ道節們退去の後守城の頭人根角谷中二

并美田馭蘭二門件の船虫媪内首斬ら高駝濱邊垂鼻の侍れ
石龜屋次團太の憐む一冤屈の罪を他が屢陳まると這那既の吻合せり矧又蟹目
御前の湯嶋の神の示現より過分な次團太の命乞と做され小の返答と那許
仰遣さる餘目もあて及て凶悪の報あり六恐れさる當所の賞罰神佛の冥慮小稱
を罪なき民を苦めぬ心報ふりあんと情地小諺さるむむとや次團太を赦免
あが解目御前の死與言定し優る御追薦あつるものごとと證と援と道理と演と
諫言濃き入れれば然し雄々たる服大刀自胸の張り弓稍弛と前竹心直る本性
思ひ返あり忍辱の鎧の中衣の袖を落涙を堰留難て現愆りあまら恥や七
旬小程遠くぬ老が身ハ蟹目の貞実賢才及りし今や思ひ合を思魚目よ
卒ら次團太と今日速に赦免を下然れも他が木天甚九久く宿野蔵の措く
訴がりし越度への罪われ封内小在るを許さるが但追放せし律小稱し這義を

具から渡一ぬ疾をせよといそがぬ由元は這憲ぬと愛然て言表あつ候の
ゆひらるる機密と次團太が知るべしなりし追放の折稲戸の若黨秋野井三
郎が次團太の其示して解目御前の御仁慈と片貝殿の御性直とあつるの與知する
汝が身を取て過分な秘密の情申あれ生涯御思とさるる勿論御法度と畏
とて當國ある願居りし倘再犯の罪あつる度へ赦されかり秘よの思を思ひな稲
戸主の内意とて言前條及び次團太の駭嘆と感涙の找む覚もその飲を
述る間も雜兵追立られてあつる約莫二里許旋る地方を檢護の雜兵と立別れ
片貝遠く片貝へなり去りけり今程の百堀鮒と片貝の沙汰とぞ知と茶土占と總て
在る雜兵のかりゆく程走りゆく次團太を迎て飲ひを軒茶店と總て携來る衣兒
と腋挿の刀をも遞與して準備の食筒と啓て丁寧の薦る程却湯嶋とありし
の料も那坐敷の師物四郎の帮助とゆる首尾と告知され次團太の亦秋野井三郎の

きひみろ さやまゆ。めいろう よひる。大田大川の義兄弟大阪毛野胤智といふ
聞き秘密を耳に示してその物四郎と喚做らるる大田大川の義兄弟大阪毛野胤智といふ
勇士あり。石濱信濃路西所の血戦往日又武藏の鈴茂林にて復讐の事をも。那人
上六徳々んとて。随解知れ。卿天く胆潰して。原來我恩人の大川大田の宿因
ある大士の隊をとりけり。今を思ひ合はれ。然る縁を頼めども。最做らるる技を
解目御前の愛の秘術と捉賞代て。身を斬く救れんや。さても。さるる良縁
奇遇と感嘆ま。その秋に就て亦憎む。土丈二と阿嫂との為体。箇様々といふと奸淫
不軌の顛末。其の報を次園太。思ふ我も。大坂王の秘術不測の帮
助にて。解目御前の仁恕不遇。土丈二。嗚呼善評られて。獄裏の鬼と。今幸
いふ窮鳥の籠中。とて棲し。易る小做。阿容々々と。這奴們を。那在せる大丈
夫と。要をあれ。尋思と。曾の秘密と。卿と。一誤不及。その義
心去る。已の既。その意あり。情地。小千谷。立。共。本意。遂。那里へ到

らば箇様々々と。その進退を定る。卿も。一刀を。帯て。來ぬれ。事足れ。脱落。させ。と。情
語。謀。合。と。その。暈昏。身。装。つ。邊。件。の。茶。店。と。立。去。て。烏。夜。を。便。り。小。間
道。も。連。り。路。次。と。言。ひ。小。千。谷。と。片。貝。の。間。で。千。々。三。嘜。と。喚。做。る。一。條。路。を。來。り
ける。夜。は。三。更。過。り。けり。時。早。と思。ふ。路。傍。守。る。人。在。る。野。豬。菰。屋。あ。れ。り
立。寄。り。卿。と。共。侶。の。夜。の。深。る。程。小。忽。地。小。千。谷。の。と。り。て。伴。當。張。燈。を。秉
あく。這。方。來。る。者。あり。又。片。貝。の。方。より。張。燈。引。提。て。一。個。這。方。と。臨。て。來。る。あ。り。這。那
俱。野。豬。菰。屋。の。邊。を。邁。遭。ひ。を。他。們。が。張。燈。の。火。光。に。就。て。相。れ。紛。々。と。あ。り。小。千
谷。の。と。り。て。來。る。は。次。園。太。が。妻。嗚。呼。善。を。伴。當。の。腕。ハ。と。喚。做。る。食。客。又。片。貝。の。か
より。か。り。來。ぬ。は。奸。夫。土。丈。二。の。け。れ。送。り。張。燈。の。花。飾。を。と。精。々。嗚。呼。善。先。聲。を
被。て。主。死。何。と。邊。か。り。衛。里。長。故。老。徒。ら。ち。連。て。か。り。來。ぬ。は。身。單。に。送。され。り
か。の。遲。速。の。料。か。り。胸。の。休。ら。ぬ。立。て。見。居。て。不。嫁。で。見。暮。され。顔。え

ねん思ひ難々 靴八刀袴を俱と迎ふはなれり。この間土丈二も馳て近死立住りてそ亦要る
支きたれ知らざる今日亭午より極可片貝の御館へ召されてせらる約莫一响有餘
や仰せられ東箱のなかへ。この趣木天竺丸の盗賊東路を司馬濱の邊に在り。こ
這回その罪發覚れ。那地を鼻首せし。任れ素より次園太の那盗賊か。あはれ
木天竺の短刀を久く家藏の措て許稟さす。越度あり故那身を追放せし
衆皆その罪をあらわす。但土丈二の御用あり。姑且等し。れを餘の退り。と
身の暇も賜ひ。我の單送されて後寛僧都の心地を罪あへりも覚れ。却る程
まつ下下時。時侯再局へ召されて有司達真中。若し量る。次園太。木天竺
丸の盗賊として正可許稟。土丈二の次園太の那盗賊さ。任れ若し疎忽の罪あり。信と仰
付らる。格別の御仁恕。今番御沙汰。及れ辱し思ひ。以後と慎む
べし。退り。おれと叱られて。せらる。年々果され。脾捻くる。小腹も立。城下の酒肆へ立寄て

氣附其の諸白利方。多に五六合塞。胃と忽地。閉れ細魚の塩加減を。又あ各物。と
夜食も一。碗又一。碗飲ら。食ひ。せ。程。憶も。目。消。り。と。の。鳴。呼。善。ら。ち。笑。ひ。て。然。る
せらる。好れ。事。多。と。怒。思。ひ。過。の。せ。れ。將。有。の。折。の。准。備。も。那。這。と。か
撈。取。り。十。兩。金。と。懐。斂。め。る。夜。行。ゆ。は。れ。是。も。胸。の。安。ら。ぬ。と。り。今。這
里。より。男子。二。名。も。俱。せ。ら。れ。後。安。ゆ。は。れ。今。ゆ。後。安。り。那。人。の。か。薄。情。か。那
短。刀。の。盗。見。が。東。國。で。招。う。せ。ら。れ。思。ひ。隨。ふ。る。り。非。如。追。放。せ。ら。る。も。命。あ。恙
も。在。る。寤。寐。安。ら。ぬ。か。と。土。丈。二。も。亦。念。の。過。る。追。放。せ。れ。罪
人。が。倘。當。國。に。願。居。ら。又。訴。て。結。果。ん。然。る。り。の。を。知。ら。ぬ。那。人。も。あ。ら。ぬ。一。封。疆。と。立
去。て。わ。る。る。日。の。あ。ら。ぬ。と。八。然。と。心。張。燈。御。と。邊。小。蟬。燭。の。真。と。撮。と。棄
寔。の。哥。々。の。う。簡。妙。人。の。噂。耳。引。立。て。願。居。る。と。安。知。ふ。そ。亦。汲。怪。の。幸。い。訴。稟。さ。ら
擯。捕。ら。れ。其。度。の。殺。れ。ん。倘。又。遠。く。立。去。ら。弥。勤。の。世。ま。か。る。月。る。その。氣。で。あ。ら。ぬ。と

鳴呼善の士丈二も憶を俱わらぬ事宿所へ還りて實中ふら
 ともしらるる途途中立聚合て長商議を人ありて夢知れ争何せん卒くべし
 との程風音きき猛雨投石の像く降るけの男女二個の牙人の散驚き天より仰せ
 見の頃者の日和癖ゆく降るも星斑點の在の姑且も必承んこの這頭の家を
 いらふと袖を袖頭で見れば向の野豬菰屋あり一霎時那果立聚合て坐宿せん夜る
 濡を登るとと信走りて飛が似る路備る菰屋と今宵の死所と知る聲諭の
 佛の座五行鴛鴦某蹊躑れて七草足ぬ路備る存一雨と避んた然又次園太小千谷
 へ赴く中途で料も士丈二鳴呼善が腕八と共侶の這路備る立取合てら相譚ふ
 たらはるは是天の錫とありの勇む不勝の飲俱小性起り鯽之を推鎮り耳を澄ま
 且那奴們がらふと所果ててと下とと深念も足場と量り鞆釘を濡一身を
 潜しては月も動静を規程の俄然と降る驟雨の慌る鳴呼善士丈二們各先と

争入る欲き野緒小屋より次園太の又出んとある送の勢は猶豫る憶を撲地
 と撞中の男女兩個の胸前を左右下と引扱て怒り小乗を聲も劇く奸丈淫婦們
 と名立れ次園太も覚期をせよといれて吐嗟と駭怖る鳴呼善は士丈二も呼阿
 とをり小猿馬を飛く振放さんと角ひを次園太緩巻中一中で前画撲地と蹴回
 士丈二遥か射斗りて水田の畔へ倒れり次園太はりと抜見れを片ふるの刃の電光鳴
 呼善の右の肩尖を研れて苦と叫びも果ぞ颯と潰る鮮血と共小虚空と抗んで仰反り
 倦り一程の腕八ら士丈二跡を續いて走り入るまでける今次園太と名告れる聲も胸を
 潰る胡諜て張燈其里あら葉て足信と逃走と鯽三透を軒菟出て自物守
 と喚りく近づく儘腋挿の刀を見りと引抜いて敷る甲斐もなく鞆釘走りと柄の虎
 考るも残り刃の前画怪蜚て叢裏の膝下へ腕八あれふ力とめて身と振り回し衝と
 寄せ四も耳引組んで潰倒えとを挿るけの介程の士丈二次園太に投られる



次圖太

八代傳九郎卷十五

十九

大塚宗吉



慎之慎
之出於
汝返於
汝者也

八代傳九郎卷十五

大塚宗吉

えん若情願然もあまと思ふも推登と後妻お做して世帯を掌らうと又土丈二我
所親の孤兒であつたけれど總角の比より我乾兒として相撲の技を教導し京鎌倉勸進
相撲の名を載らうとまゝありし抑是誰か庇で有徳の素より若們的庸常の妻あつた
渡世の與の弟子あつた因に義を忘れて密通するその罪鏡にかけられた然らうと世
間似る愁見るあつた男女はく追ひて地方の住む林あつた若們不義の情
慾飽う我身と推整し世帯を奪取んとて事計較を評訴し冤枉の罪お陥し
たる悪越極まり尚れをも忍ぶべからざるも皇天后土も這奸
逆の賊男女を容れぬも眞罰陣と旋々目今我屠らる悪報を思ふも甚
そと罵り責め那這と刃頭を突け苦む土丈二嗚呼善の鏡のあま聲
中相夜の虫も異るも縁ある脚を動して息絶々呻吟と次圍太然と冷笑
い若們今け免れぬ命を惜むの愚魯を念佛させと合直を刃と抗く土丈

二が胸前罵詈と刺申け下布れ嗚呼善を串れる四幼八苦の両目で握り眼を
睜て共侶の息絶けり既ふと次圍太血刃と抜合も拭く鞋の敏めり鮫八
が什俯する身邊を杖と近づて足と頭顱と踏動しをれ敢見も死意若家之
山の小經紀駝牡ハ獨子あつた相撲を好むと我弟子あつた近曾若
二親の世と去りし生活お親も産破り邑と追れてを宿する者ありと我
師弟の義を思ふ宿所は喚合り意見と示し人お做んと東西に没れて去歲の
秋より養ひ素より不実の本性お思ふ思ふお思ひお思ひ只その同氣相求の同
悪と相憐む土丈二相譚れ嗚呼善折々餌を飼れ非美の利慾お思ひ土丈
二が詭訴の折若他が證人お做て巧我を誣るその癖の趣ハ我身獄舎在り日
人傳るが知ら然今招ねも若も嗚呼善お俱せられて命を贈らぬと若則
是天罰也怒る処るへ観念せよと罵りて項を駭しく蹂躪と云となりふ

てあ、ちり、腕、も、呼吸、の、絶、の、け、の、當、下、次、園、太、の、側、を、急、に、さ、ら、さ、ら、と、喃、卿、三、這、奴、の、脚、を、張、く、腕、も、呼、吸、の、絶、の、け、の、當、下、次、園、太、の、側、を、急、に、さ、ら、さ、ら、と、喃、卿、三、這、奴、の、和、郎、の、腦、骨、を、摧、れ、た、始、り、痛、く、弱、り、け、ん、休、ま、ら、ず、の、終、十、々、威、を、刺、さ、さ、も、又、生、く、べ、う、も、あ、る、か、嚮、の、鳴、呼、善、が、土、丈、二、告、る、と、穿、て、我、知、り、他、が、屍、骸、の、懐、必、全、十、両、わ、ん、开、も、亦、都、く、我、東、西、あ、れ、今、も、も、天、道、饒、一、あ、ん、开、を、盤、纏、お、て、他、御、へ、走、ら、ん、探、り、く、あ、つ、快、歩、一、ね、と、の、卿、三、ち、所、を、そ、も、勿、論、の、り、さ、ら、と、這、里、より、小、千、谷、へ、遠、く、お、の、え、な、さ、ら、さ、ら、と、情、地、の、宿、所、を、立、ち、有、ん、涯、の、錢、財、を、攫、り、て、走、ら、ん、身、の、所、因、を、求、る、折、の、本、錢、あ、る、ん、只、這、奴、們、を、屠、り、せ、と、空、き、ま、ら、ん、と、い、ふ、次、園、太、頭、を、押、て、そ、の、亦、和、郎、が、の、ま、さ、ら、と、然、る、飽、く、と、知、る、小、千、谷、の、宿、所、我、宅、あ、り、那、里、の、東、西、と、我、有、ん、も、既、に、罪、と、蒙、り、追、放、せ、れ、我、身、を、我、東、西、と、我、有、ん、も、然、る、と、あ、る、ま、さ、ら、か、り、來、て、女、妻、淫、婦、を、怨、復、し、屍、骸、お、送、れ、る、十、兩、の、金、を、合、さ、る、危、死、窮、の、為、に、已、こ、を、治、さ、る、所、為、る、も、怨、と、押、強、人、と、五、十、步、百、步、の、間、の、天、道、饒、一、あ、つ、び、這、里、片、貝

街頭、を、夜、の、暁、の、人、迹、絶、く、知、れ、る、と、幸、い、な、れ、快、く、影、を、躰、ま、と、ら、ぬ、卿、三、有、理、と、悟、り、て、恥、を、鳴、呼、善、が、屍、骸、を、探、る、項、不、掛、る、財、囊、の、内、の、果、七、十、兩、許、の、金、あ、り、あ、つ、そ、の、俵、合、さ、る、次、園、太、の、邊、與、せ、る、を、懷、敏、め、四、下、と、見、返、り、さ、ら、と、い、ふ、丸、卿、三、且、良、の、と、辞、讓、も、有、敷、糸、礼、あ、り、儀、あ、り、心、を、入、の、道、俱、迷、ぬ、野、十、玉、の、烏、夜、の、潜、お、便、さ、ら、と、路、を、求、め、く、通、宵、寢、く、も、走、り、け、り、却、説、を、明、の、朝、開、れ、近、江、地、方、の、莊、客、が、鳴、呼、善、土、丈、二、們、の、横、死、を、る、自、如、と、ら、故、馬、を、村、長、に、告、り、殺、さ、れ、り、時、既、に、幾、ら、侵、り、け、ん、敵、を、知、る、死、照、驗、を、け、れ、隨、即、事、の、趣、を、片、貝、の、有、司、に、訴、ぐ、実、檢、使、を、宣、玉、る、恥、を、詮、議、し、遂、に、誰、が、所、為、る、を、知、ら、ず、は、け、れ、鳴、呼、善、們、三、個、の、亡、骸、由、縁、の、者、合、措、く、べ、し、居、宅、家、火、に、没、官、せ、れ、て、石、龜、屋、の、迹、断、絶、一、今、番、購、り、る、者、を、家、在、替、り、け、り、怨、を、鳴、呼、善、土、丈、二、們、を、殺、す、次、園、太、が、怨、を、堪、ぬ、所、仍、中、と、あ、り、け、め、と、猜、と、い、者、三、り、が、風、聲、片、貝、へ、穿、え、あ、る、と、稲、戸、由、元、け、り、有、司、們、の、豫、り、土、丈、二、鳴、呼、善、が

ふぎふたの。つらや。有。おれ。事の疑ひありといふも。今此より。次國太の
不義不貞の訴を憎く思ひて。反て次國太を憐れ。これ。事の疑ひありといふも。今此より。次國太の
往方と涉獵り追捕へ。紅明せんと。沙汰の。鳴呼善ま。二腕八們。與小虎家。素
んと欲するの。も。わ。と。り。れ。他。們。が。海。津。津。逆。の。里。人。夜。話。お。ま。り。と。る。程。歴。て。灰。燼
え。け。間。話。休。題。今。程。次。國。太。の。卿。之。を。從。へ。書。其。難。れ。夜。を。宗。と。走。る。信。濃。上。野
武藏。ま。の。角。谷。家。の。封。内。を。長。尾。家。の。所。領。ゆ。ま。り。れ。然。る。其。方。か。起。る。去。向。の。追。捕
心。許。す。且。陸。奥。へ。赴。け。姑。且。那。地。小。日。と。弥。り。支。の。定。り。た。ん。時。候。我。投。方。へ。引。れ。と。
の。春。二。月。中。旬。及。び。て。奥。の。會。津。に。來。り。れ。客。店。に。逗留。し。て。卿。之。と。商。議。を。成。俱。ふ
久。後。の。り。と。謀。る。路。費。へ。總。十。兩。金。を。卿。之。も。貯。禄。に。る。長。尾。旅。宿。を。せ。づ。も。あ
ま。然。る。路。費。の。竭。る。以。前。此。小。の。旅行。經。紀。と。も。日。毎。小。錢。を。給。ふ。も。あ。つ。進。退
そ。こ。の。ま。ま。後。お。せ。ぬ。術。を。爲。す。却。何。を。賣。る。と。思。ふ。更。に。思。念。を。旋。ま。す。次。國。太
其。里。小。倉。へ。後。お。せ。ぬ。術。を。爲。す。却。何。を。賣。る。と。思。ふ。更。に。思。念。を。旋。ま。す。次。國。太
師。傳。の。膏。其。小。撲。傷。折。損。の。奇。方。あり。折。々。入。施。け。る。經驗。あり。と。い。ふ。と。も。某。材

赴
二
三

も亦輒かれ。身へる。旅。舎。存。在。す。件。の。某。を。製。作。せ。て。卿。之。に。賣。あ。る。か。せ。次。國。太。の
笠。を。深。く。あ。く。日。毎。小。會。津。の。巷。街。を。呼。ら。徧。歴。り。て。賣。り。欲。せ。り。か。も。人。の。某。の
可。不。と。い。ふ。も。知。る。や。あ。ら。れ。ば。そ。を。買。ふ。者。稀。し。日。の。房。錢。不。足。る。も。あ。る。左。右。主。房
程。小。名。春。と。憂。かり。旅。宿。小。銷。し。て。三。月。下。旬。あり。命。の。綱。と。思。ひ。ぬ。十。金。の。路。費。の
過。半。竭。り。残。り。寡。く。形。隨。次。國。太。情。思。を。々。曩。の。故。御。を。追。れ。り。と。亦。も。五。十。日。の
光。陰。を。靡。せ。れ。縦。追。捕。の。沙。汰。あり。と。も。今。大。緊。實。と。い。ふ。盤。纏。匿。り。け。り。け。り。け。り。
この地方。小。日。と。過。ぎ。く。馬。を。あ。ら。ん。ご。ん。い。ぬ。武。藏。赴。け。湯。嶋。の。天。満。宮。詰。て。解。厄。神
恩。の。賽。願。と。致。ま。く。兼。て。大。阪。大。田。犬。川。那。三。大。士。在。処。と。索。ね。て。再。生。の。恩。値。遇。の。縁
その。欽。ひ。を。の。り。も。あ。ら。始。あり。終。り。恩。と。思。ふ。者。似。たり。と。尋。思。と。も。卿。之。不。徳。と。と
説。示。ま。す。卿。之。所。異。説。も。多。く。あ。る。へ。と。応。ふ。然。ら。去。向。を。急。ん。と。その。詰。朝。會。津。の
里。の。歇。店。と。俱。立。去。り。日。小。歩。夜。小。宿。の。を。武。藏。の。豊。嶋。郡。小。倉。へ。湯。嶋。の

神社と拜まらり。卿と共侶不黙禱小時の程を覚む。その日の拜殿は通夜を。猶
 久後の真助と祈ふ恩人物四郎の大阪生並に大田大川の両勇士の環會のいねとく
 思ふ涯りと祈請まらり。更去向と思慮る下總の徳小文吾が甘里まらり。豫知
 正たられ。那里を尋問。在処を知るよりあらん。秋とそ。旦卿三小意表と示して共
 侶不徳へ赴けり。里人們は問試。不件の天田小文吾の猛可不當所を立去り。今も
 六稔あり。やるべし。親文五兵衛の故ありて安房へ移れり。那地也。身故りしが家の
 絶。小文吾の哥のいふあり。是れ一かかりの事。虚談をんと人の答不
 便りとゆされ。次因太望と失ひ。又卿と共侶下總武藏の封疆河多西の澳村
 まてかり。來りける。路費の竟不使ひ果して。絶。一日飲二日許。支るまふり。かど御高
 奥の會津也。賣と徳殘。膏茶はる。百盒餘あり。這頭でこれを賣盡。本錢を
 失ふに至り。是より日毎の房錢をゆべ。然りければ先度のど。只呼あくのまらり。

今番も買入稀る。人の心と樂まる。遊藝多と施き。衆人取合へられ。然り筋
 素より疎。本性も争何せん。只年来。嗜む技の相撲の外。あつても。ね。所詮
 老と忘れ。羞と忍びて。箇様々の鳥許技と。女看官極めて。マラ。然り。膏茶の
 あつて。賣れ。さんやと。師弟當晩の歇店也。惜地不商量。され。招牌多。の准備
 あれ。詰朝も亦。事。這那と。時を移して。既。未。牌。下。刻。より。三。觀。鼻。不。立。て。統。音
 古相撲の技を。人脚を。留。め。立。取。合。て。專。膏。茶。と。售。す。せ。不。禍。鬼。忽。地。其。首。不
 起り。一旦難義。及。び。小。料。も。親。兵。衛。と。孝。嗣。助。力。せ。れ。て。事。の。あ。及。び。ま。ら。り。然。る。石
 龜屋次園太。這。來。路。の。長。談。脩。話。と。卿。三。と。迭。代。解。と。詳。多。り。け。れ。ば。孝。嗣。も。耳。残
 傾け。我身も。似。る。冤。屈。の。罪。科。他。が。奇。遇。も。湯。嶋。の。神。の。真。助。あ。ん。と。思。ひ。け。り。登。時
 大江親兵衛。次園太。あ。ち。向。ひ。て。適。愛。を。命。運。九。死。と。出。て。一。生。と。ゆ。る。洪。福。の。ま。ら。り
 び。淫。奔。の。後。妻。不。義。の。乾。兒。不。然。と。復。して。天。罰。を。示。さ。し。マ。ラ。死。大。丈。夫。の。所。ゆ。と

併卿之師恩と思ひ義不仕りて水火裏に艱難と俱にあらは是も亦容易
 なる弟子なるが如し此就て今又思ふに叟は只大阪毛野に救れりやと人の傳ふ事
 知りて信乃道節莊介小文吾現八犬角の六犬士の料を叟の帮助せりてと人生さ
 ばバ知るべしと云ふ次因太訝りてそ亦甚なる故にそと向ひ親兵衛然りと云々
 命乞の事解目前の仁怒りも服大刀自の尚疑ふ速更饒一難う那賊婦船
 虫が奸夫媼内と俱に司馬濱で牛の角の突殺される開が昔年来の積悪成
 寫してあり木天蓼丸と偷合する事を見せりて稲戸津衛由元が知りて
 隨即服大刀自へ上と諫め六犬刀自言下下感悟して時を移さぬ恩赦の沙汰あり
 叟が獄舎を出されこの一椿事よりてそ亦船虫媼内を牛の突して誅戮せしは是
 神佛の所ゆるざる夜艾船虫の大田撞見して生拘れ又媼内は道節信乃們不投
 伏られて俘囚する折々莊介現八犬角の皆その濱邊に聚合する六犬士相謀りて

賊僕賊婦を誅す甲夜小媼内を竊合する赤鬼四郎の牛の角を劈り殺戮し
 その積悪の世の人不知せん為に他們が背罪戾數箇條を寫着けし乱臣賊子と後々
 ても懲さんとの當意即妙共六犬士の所為する人知され濱の堂なる簡魔の官罰
 ると生推量とあるの毛野道節が復讐する翌朝の事あり正月二十一日に約莫
 尾の顛末の酒家富山に在り時神女が示教ありて知れり有徳の折六犬士們と
 叟の與らるるあねと船虫の背の寫れ文字を據て木天蓼丸の盜賊正可不知れり
 服大刀自の疑い解けし叟の轍魚の江に放され死すことなるあはれは是れ由り又思
 へ叟が必死を救ひし單大阪の事をも信乃道節莊介小文吾現八犬角の六犬士も不用
 意なりと帮助せられし中も小文吾莊介叟の義侠を敢て折々噂をせし所は
 より餘の四犬士も越後然る者ありと知りて却小文吾莊介が片貝を死を免れて他擲
 走るといふ那由元が善の與る誠心よもなるその故の箇様々と事の崖略を解

その時小文吾其介の是多の... 別を惜むる為の人... 累の害怕... 那二天士の心術... 冤家と云ふも為の磨齒...

酒家の轉して注し作りぬ... 神出鬼没... 奇偶をいふ... 世あて欲親に疎に推並て... 稟すもさほあまのありの...

鯉權佐守如の獨子也。河鯉佐太郎孝嗣と喚做る。忠孝無二の後生。是這人の
 名と告げ次國太卿之胆を潰し顔も目成り。その亦思ひのり然る方
 様と知らせし太く無礼と仕りぬ。饒をあらうち勸解を親兵衛禁め。不口
 誼の目今の急務あり。這賢才子の事成就。又一條の奇談あり。始の結の終の
 箇様々々と守如孝嗣が忠あり。且父子兩度の大功。奸黨が醋く思ひ。譖ちて
 陥れ事因り。孝嗣の今日前面岡で死罪の約せんとけ。折靈執政木が機変も。
 孝嗣を救ひ合ひ。事又那兩個の政木と和奈三の事。又根角谷中二の事。親兵
 衛の料もその折行會。那光景と目撃。孝嗣が死と免。折便直と以武
 藝の本事と試。却意衷と示。友垣と締。事政木執の狐龍。做り
 升天奇特の事。その崖界と解。示。孝嗣も亦漏。補。母の慈善と政
 木の恩義。且親兵衛と值偶の縁毛野道節。七犬士の忠あり。義あり。好情あり。

身は命より薄命とて不憚れ。次國太と卿三。又奇小敬馬に脚と拍。或
 悲し或の喜。或の怒。或の笑。十状萬態。み。林。膝の找。骨。骨。骨。
 只顧感。己。己。己。且。次國太の親兵衛。向。額。衝。御教諭。自他
 得失の所以。兼。知。和。君。の上。高。疎。函。今宵。猛。可。上。總。館。山。と
 へ。邁。出。船。這。里。故。知。其。頭。事。所。以。
 ほ。親。兵。衛。領。然。之。他。事。紛。解。示。暇。中。御。高。中。既。小
 酒。家。七。犬。士。先。不。慮。里。見。殿。仕。館。山。の。城。預。け。れ。憶
 邪。物。の。障。身。也。館。の。覚。始。七。犬。士。們。在。在。處。送。也。送。也。送。也。
 往。日。猛。可。遊。歴。の。暇。之。賜。り。姑。且。舊。里。下。總。市。河。旅。宿。今。朝
 早。天。より。立。去。り。這。頭。之。徘徊。を。詳。説。く。願。未。箇。様。々。を。を。
 墓。田。素。藤。が。謀。叛。の。事。且。親。兵。衛。單。身。也。館。山。の。城。赴。り。素。藤。と。生。拘。り。



兇徒と降て城と拔れ事并素藤を赦免の事且濱路姫の鬼病も館
山より親兵衛を召あさる姫上の看病の諫めいり又親兵衛が所藏の靈玉前
後兩度奇特の事伏姫神の靈驗擁護の事の趣も畧談を是より後那地の事
洒家知るも多し御小政木忠告せられ上總亦復兵乱の料も皆知る事
ゆゑも故り又佳くとも素藤の女僧妙椿が幻術の補助ありて館山の城を襲
事當日城頭人より登桐山へ生拘れ又田税戸賀九郎と甘屋八郎の辛く
命を免れ他郷へ没落する事との故小稻村よりて荒川兵庫助清澄が君命を
稟奉り素藤を討隊の大將中館山の城を攻伐し那妙椿が幻術を破るは術
わざと今小全功とゆゑの傍折る義成朝臣の靈玉の奇特あるより御向親
兵衛を疑ひひの怪尼妙椿が反側の幻術ありしを悟り至程伏姫神の
示現ありければ千慮の一失を御後悔大なるを快親兵衛を召返して妖賊を

伐夷ぐく并小自餘の七武士を招て聚合んと昨日濱崎照文と燒雪與四郎の
仰付られ隨便大士と招會の使不達ありて政木の老媪が忠告の趣と悄語は示
を綴る路次同かゝる死使們不逢とも曩も素藤と赦免の折我々の衆議を折
衷て我君も亦東氏も約束の言われ快妖賊を討滅し且民の余土灰を極ひ
具館の御心を休めなると思ふも水路を急ぐる故りは小次園太卿三
心漫小勇れもそ亦要ある椿事願ふ我王僕をも死伴の召れしか死伴
助足らざるも空ろなむもあつてもを親兵衛推林めり志は然る事
先度我身いさめり素藤を成生拘り今中人の封助と借んや然れと這
河鯉生の我亦思ふよりあれ御も同伴と饒なり叟の酒家と新百識を大田
大川の舊識より且大阪より再生の恩ありて一日も多く百會して恩と
謝徳の答る理義を思へる惣酒家不徒んと欲する俠氣ありとも宜しから

意に大田大川我七個の義兄弟千住の驛より程遠く徳北の御士永
垣亥三夏仍の宿所在と必結城の城下より大法師の草庵に來會て
本月十六日の大法遊に預らるる欲するも、叟の明日疾徳北へ仍逢結
城へ赴はる。十六日程ゆるると諭せ、次國太眼を睜り、その宜まることなから
大阪大田大川主の舊恩徳義を今ゆふ忘れざるあはれども、身も今日厄
難と極まらり、恩義あり、今番の大事小俱せられ、後小自餘の天士達、素
るも遅はる、枉て饒をぬねと口説け、いづれ時も程り、短夜るま、更の
鐘鐺々と響えけり、登時親兵衛の懐、次國太を推禁め、夢を叟彼那鯨
音、真夜半る、追風、誰何船公向促え、いひて、みづら、立ま、程小、奥の一室、
人あり、登、大江氏等、いひ、あ、と喚、此、是、甚、る、人、且、下、回、解、分、を、聽、ね、か、

南總里見八犬傳第九輯卷之十五終

